

聖書：マタイ 14：1～12

説教題：ヨハネとヘロデ

日時：2019年8月4日（朝拝）

今日の箇所は読む人に少なからずショックを与える箇所ではないでしょうか。ここにバプテスマのヨハネの殉教が記されています。前にヨハネが出て来た 11 章では、彼が牢屋の中にいたことが記されていました。獄中から使いを遣わして、イエス様に質問をしたという記事でした。その後、ヨハネはどうなったかと思っていたところ、ここに実はヘロデによって斬首されたという記事が出て来ます。これはこの時なされたのではなく、ヘロデの回想という形で記されています。ヘロデはここでイエス様についての噂を耳にして、自分が殺したヨハネのことを思い出したのです。そして家来たちに言いました。「あれはバプテスマのヨハネだ。彼が死人の中からよみがえったのだ。だから、奇跡を行う力が彼のうちに働いているのだ。」ヘロデは不本意な形でヨハネを殺したため、イエス様の噂を聞いてその良心がうずいたということなのでしょう。そのヨハネの処刑がどのようになされたかが、ここに説明されています。

まず事情を簡単に見て行きたいと思います。このヘロデは兄弟ピリポの妻ヘロディアを自分の妻としていました。ヘロデはもともとアラビヤのナバテヤ人の王アレタ 4 世の娘と結婚していましたが、ローマを訪問した際、そこで裕福に暮らす異母兄弟ピリポの妻ヘロディアを見初めます。そこで彼は自分の妻と離婚し、兄弟ピリポの妻ヘロディアを奪ったのです。バプテスマのヨハネはこの悪を糾弾しました。4 節に「言い続けた」とありますように、彼は繰り返し、継続的にそのようにしました。そのためヘロデはヨハネを邪魔に思い、ついに彼を捕らえ、牢の中に閉じ込めていたわけです。彼としてはヨハネを殺したい、彼を除き去りたいと思っていました。一方でヘロデはヨハネを恐れる思いも持っていたようです。マルコの福音書 6 章 19～20 節：「ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、できずにいた。それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながら、喜んで耳を傾けていたからである。」ヘロデはヨハネを邪魔だと思いつつも、その心のどこかには聖なる世界への憧れのようなものも持っていたのかもしれない。

しかしついに運命の日が来てしまいます。ヘロデの誕生祝いの日にはヘロディアの娘が皆の前で踊りを踊ってヘロデを喜ばせます。ヘロデは上機嫌になって、あなたが欲しい

ものは何でもあげると誓って約束します。さてどうなったでしょうか。その娘が母ヘロディアに相談すると、ヘロディアは娘を通して「バプテスマのヨハネの首」と言います。ヘロディアにとってヨハネは早く抹殺したい人間です。ヘロデはこの願いに当惑します。彼としてはこのような形でヨハネのいのちを終わりにしたくはなかった。しかし人々の手前、結局それを実行してしまいます。ヨハネは首をはねられ、それが盆に載せられて少女のところに持って来られました。そして少女はそれを母のところへ持って行きました。こうしてあっけなくバプテスマのヨハネのいのちは取られ、彼は殉教したのです。

私たちはこれを読んでどう感じるでしょうか。こんなことが許されて良いのか！こんなことがまかり通って良いのか！とやるせない気持ちになる方もいるでしょう。またなぜ神は何もしないのか、どうしてここに介入し、この悪事をやめさせなかったのかと思う人もいるかもしれません。しかしこれはこの時だけのことではありません。イエス様もこの後、敵の手で十字架刑に処されます。あるいは使徒の働き7章に出て来るステパノの殉教のこともあげられます。またその後の歴史における多くの殉教者たちも然りです。他にも多くの理不尽なことがこの世界で行われ、そのままになっているようなことがたくさんあります。このようなことが起こると、ある人々はなぜ神がいるならこのことを放置しておかれるのかと口を尖らせます。そうならないようにすることはできなかったのか。そして、やはり神はいないのだ！とまで言う人もいます。さて私たちはどうでしょうか。しかし私たちはあまり性急にそのように言わない方が良いと思います。私たちは本当に神は悪を見逃さずに、直ちにさばきを下すことを願うでしょうか。もしそう願うなら、私たちは誰一人こうして生きていることはできなくなります。神の御前に罪ある私たちはどうの昔にさばかれていなければならないこととなります。私たちは「それは困る。そうではなく、ひどい悪だけとりあえずさばいて、ちょっと悪い程度の私の悪はまだ見逃して！」と願うでしょうか。しかしそういうわけには行きません。神の前に私たちは相当の悪を犯しています。はっきりしていることは、神はまだ最終的なさばきを下していないということです。そういう今の世にあっては、このヨハネの殉教のようなことは起こり得ますし、それが起こってもそのままになっているというケースは現実に多くあるのです。

さてこのような箇所を私たちはどう読んだら良いのでしょうか。著者マタイはどんな意図をもって、これを書いたのでしょうか。それはこの箇所の文脈に注目するといくらか見えて来ます。前回の13章53～58節では、イエス様が郷里のナザレで人々から拒絶さ

れたことが書いてありました。今日の箇所もそれと同じ線上にあります。領主ヘロデはイエス様についての噂を聞いて、かつて自分が殺したバプテスマのヨハネの生き返りだ！と恐れました。確かに殺されたのはヨハネです。しかしヨハネとイエス様は切り離して考えることはできません。ヘロデも結び付けて考えていますし、最後の 12 節でもヨハネの弟子たちはヨハネの死をまずイエス様に告げています。ヨハネはメシヤの先駆者としての働きをした人です。ですから、そのヨハネがこのように扱われたということは、イエス様がこの後、世からどのように扱われるかを指し示すものになっているわけです。イエス様は実際、後の 17 章 12 節でこう言われます。「しかし、わたしはあなたがたに言います。エリヤはすでに来たのです。ところが人々はエリヤを認めず、彼に対して好き勝手なことをしました。同じように人の子も、人々から苦しみを受けることとなります。」 このエリヤとはバプテスマのヨハネを指していることが次の 13 節から分かります。ですから今日の箇所は単にヨハネ個人の出来事ではないのです。これはイエス様がこれからたどって行く十字架の死を暗示する役割を果たしています。世は先駆者ヨハネをこのように扱ったようにメシヤなるイエス様をも同じように扱います。ヨハネは言葉を通してイエス様を指し示しただけでなく、その死に方を通してイエス様を指し示す先駆者だったのです。

しかしこのヨハネはの死をやがてのイエス様の死とセットで考える時、この箇所には新しい意味が生じて来ます。確かにここにあるのは悲しい事件です。イエス様もこの箇所が暗示しているように、これからそのように死にます。しかしイエス様はその後、復活します。そのことはこのヨハネの死の記事を読んで悲しむ私たちに新しい光を与えるものです。その一つは、肉体の死ですべてが終わりになるのではないということです。地上の死がすべての終わりを意味するとしたら今日の記事はショックです。主のために忠実に働いた人が最後に刈り取ったものがこれだとしたら、私たちは居たたまれなくなります。あまりにも理不尽。あまりにも空しいと。しかしそうではないのです！イエス様は死を経て復活されます。ですからその後があります！地上の死ですべてが終わったかのように考えるべきではないのです。

もう一つは、イエス様のやがての復活は地上の判決への逆転を意味するということです。イエス様もやがて人の手によってさばかれ、殺されます。しかしイエス様は復活されます。これは神が人間の判決を引っ繰り返したということです。つまり人間の判決が最終のものではない。この世で相手を死に追い込んだら、その人が勝ち！ということに

はならない。最終的審判者は神です。その神が人間の判決を引っ繰り返すのです。

その視点を持つ時に見えて来ることは、本当にあわれなのは領主ヘロデの方であるということではないでしょうか。一見、今日の箇所ではヘロデが強い立場にあるように見えます。したいことは何でもできる。道徳的に問題のあることだってやり通せる。しかし彼はやがて神によってさばかれます。ある意味でこの箇所でも幾分それを味わっています。彼はイエス様についての知らせを聞いて自分の悪を思い起こし、平安を失っています。自分のした悪が脳裏によみがえって来て苦しめられています。その予感通り、彼の悪は最終的に神の前に取り上げられ、調べられ、さばかれるのです。今はまだ理不尽なことがこの世でまかり通っても、義なる神は必ず最後には正しい審判をなさるのです。

一方のヨハネは逆に高く上げられることになるでしょう。彼はイエス様と結ばれています。イエス様はヨハネが指し示した道を進み、死を乗り越えて復活されます。とすれば、イエス様に結ばれているヨハネも、その祝福に生かされる者となります。彼は結局何も失いません。地上の人生だけ見るなら、あまりに理不尽な最期を迎えたような彼でしたが、やがてイエス様にあって復活し、永遠のいのちに生かされる者となる。人間の間違った判断をすべて引っ繰り返し、正しいさばきを行われる神によって、豊かな報いを受ける者となるのです。

さて私たちはこの箇所から自分にどのように適用したら良いでしょうか。大きく二つのことを述べてまとめたいと思います。一つは肉体の死ですべてが終わるかのよう考えるべきではないということです。地上の生涯がすべてであるとしたら、今日の箇所ほどショックなことはありません。悲しんでも悲しみ切れません。こんな理不尽なことがあって良いのか！と叫びたくなります。そしていつ自分もこのような不運に出会って終わりとなるかを思って、恐れながら生活しなければならなくなります。しかしこれがすべではないのです。この記事はイエス様のやがての十字架を指しています。しかし十字架は最後ではありません。その後復活が続きます。ですから死が最後ではないのです！死はむしろ一つの通過点にしか過ぎない。そしてその死を越えたところで真に正しいさばきは究極的になされるのです。ですから私たちはこの世でどんな理不尽なことが起こっても驚き過ぎないようにしましょう。そういうことが起こって良いと言っているわけではありませんが、そういうことが横行しているのが現実です。その中で私たちはヘロデと同じ道を行かないようにしたい。この世で私たちはその気なら自分の思い通

りに生きることができるかもしれません。自分の立場を使い、頭脳を使い、自分の腕力を使って邪魔な人を抹殺し、自分が殿様であるかのように生きることができるかもしれません。しかし最後に究極的なさばきがあります。ですから私たちはこの世だけで物事を考えないようにしたい。究極的にあわれなへロデと同じ道を行かないようにしたいのです。

そしてもう一つのことは、十字架への道を進み、永遠のいのちを勝ち取ってくださったイエス様に信頼して従う歩みをすることです。イエス様は私たちのためにご自分を低くして十字架への道を進んでくださいましたが、その十字架の死と復活を通して永遠のいのちの世界を勝ち取ってくださいました。私たちのこの人生が地上の死で終わるだけのものではなく、永遠のいのちへと続くものであることを知ることは何という幸いなことでしょうか。このことを思うなら、私たちはこの地上で生きる間に急いで良いものすべてを味わわなくては！と焦る必要はありません。地上で過ごす時間は、その後の永遠の生活との比較から言えば、むしろ限られたほんの短いひと時でしかありません。ですから私たちは永遠にわたる真の祝福を望み見て、イエス様に信頼し、イエス様に従う歩みをして行った方が良い。そのイエス様に信頼し、従う歩みには、地上において様々な苦しみや迫害があるということが今日の箇所にも示されています。イエス様は 10 章 21～22 節でこう言われていました。「兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせませぬ。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」 その予告通り、ヨハネは殺されました。イエス様もその道を行かれます。さらに最初の方で触れたステパノもそうですし、その他、多くの殉教者たちもそうです。しかしイエス様は 10 章 39 節でこうも言われました。「自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。」 その人は結局のところ、何も失いません。地上において何かを失っても、永遠においてすべてを取り戻し、いつまでもなくならない真の祝福にあずかる者とされるのです。イエス様は十字架への道を通して、やがて復活し、間違った人間の判断をすべてを引っ繰り返されることを私たちは心に留めたいと思います。そのイエス様に信頼することを通して、この世でどんな理不尽なことがあってもうろたえることなく、むしろ御心が完全に成し遂げられる最後の日を喜び見据えて主に従い、死を越えて与えられる永遠のいのちの幸い、またそこにある真の勝利の生活へ導かれて行きたいと思います。